

第十一課

すでに受けたと信じなさい

約束のものをいただく信仰

「だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」

(マルコ一・二四)

なんと約束でしょう。あまりにも大きく、あまりにも神々しいので、私たちの小さな心では、この約束を受けとめることができません。神の力とエネルギーが私たちの心に入って、心を大きくし、神の愛と力がいかなるものを私たちにもたらすか、推し測らせてくださるのです。にもかかわらず、私たちはそれを認めようとせず、何とかして、自分が安全と考えて納得できるものにそれを限定してしまおうとします。信仰とは、決して神のみことばの真理についての単なる確信、ないしは、ある前提から導き出された結論といったものではありません。信仰とは、神がするとおっしゃったことを聞く耳であり、神がそれをなさるのを見る目です。だから、本当の信仰のあるところに答がないということはあり得ません。祈る時、神が私たちに求めておいでにな

ること、すなわち「すでに受けたと信じなさい」ということを私たちが実行すれば、「そのとお

するとおっしゃったことを聞く耳であり、神がそれをなさるのを見て、神が私たちに求めておいでになるのがあるところに答がないということはあり得ません。祈る時、神が私たちに求めておいでにな

ること、すなわち「すでに受けたと信じなさい」ということを私たちが実行すれば、「そのとおりになります」という約束を実行してくださいませ。『イスラエルの神、主はほむべきかな。主は御口をもって私の父ダビデに語り、御手をもってこれを成し遂げて言われた』（Ⅱ歴代六・四）。ソロモンの祈りのこの基調は、あらゆる真実の祈りの基調でなければなりません。それは、御口をもって言われたことを御手をもって成し遂げてくださる神への賛美です。私たちは、この精神をもって、イエスが与えてくださった約束に耳を傾けましょう。その約束の各部分に神のメッセージがあります。

「何でも。」このことばから、私たち人間の知恵は疑いを抱き始めます。これは文字通り真実なのでしようか。文字通り真実でないとしたら、なぜ、イエスは「何でも」というような最も強い表現を使われたのでしょうか。更に、イエスがこのように語られたのは、この時だけではありません。主はこうお語りになったのではないのでしょうか。「信じるなら、信じる者にはすべてのことができるのです。」「信仰があるなら、あなたにできないことはありません。」「信仰とは、すべてを信じる弟子たちの整えられた心に、みことばによって働く聖霊のみわざです。ですから、このような信仰に対して、答が与えられないこと自体が不可能なことなのです。信仰とは、来るべき答の保証であり、先触です。」「祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」「そのとおりです。しかし、とかく人間の理性は、ここに、「都

合がよければ」とか、「神のみこころにかなうなら」という意味をあいまいにする文句を挿入して、危険を感じるみことばの力を弱めようとしています。私たちは、このように主のみことばを扱うことを大いに警戒しようではありませんか。主の約束は、掛値なしに文字通り真実です。主は、この「何でも」ということばを私たちの心に入れ、信仰の力がいかに強烈なものであるか、かしらはどんなにその肢体を神の力にあずからせたいと願っているか、御父は、御自身を全く信頼する弟子の思うままに力を与えようとされているかなどを、示そうと思っておられるのです。この「何でも」ということばの中にこそ、信仰の糧も信仰の力もあります。「何でも」ということばを弱めれば、信仰もまた弱くなります。「何でも」とは無条件です。条件があるとすれば、ただ信じることでしょう。信じる前に、神のみこころが何であるかを見出し、それを知らなければなりません。信じるということは、みことばと御霊の力にゆだね切ったたましいの動きです。それで、ひとたび信じる時、不可能はなくなります。神は、私たちが、この「何でも」ということばを、自分たちの考える可能性の標準にまで引き下げてしまうことをお許しになりません。キリストの、「何でも」というみことばを、今こそ単純に私たちの信仰の目標とし、また希望として受けとめようではありませんか。それは種となることばです。与えられたとおりにいただき、心の中に納めておけば、やがてからが破れ、根が出て、いっばいに枝を張り、豊かな実を結ぶようになります。

「祈って求めるものは何でも。」この「何でも」は、その答を期待するために、神のみもとに持ち出されるべきものです。そして、これを受ける信仰が祈りの実なのです。一面では、信仰は祈りの前に存在すべきです。しかし、他の面では、信仰は祈りの結果であり成果です。救い主の御前にあって、救い主と個人的に交わる時に信仰が生れ、初めは手が届かないように思われたものをつかむことができるようになります。自分の願いが神の聖いみこころの光のもとに照らし出され、動機を調べられ、本当にイエス・キリストの御名によって、ただ神の栄光のために求めているかどうか試みられるのは祈りにおいてです。私たちが、正しいものを正しい心で求めているかどうかを、御霊に示していただくよう待ち望むのも祈りにおいてです。祈る時、私たちは自分の信仰のなさを自覚し、信じますと御父に言うように導かれ、忍耐して待つことによって、自分の信仰の確かさを証明するようになります。イエスが私たちを教え、信仰を燃え上がらせてくださるのも祈りにおいてです。ですから、信仰に答が必要だとは思わないと言って祈らない者、あるいは祈っても真剣に祈らない者は、決して信じることを学ぶことができないでしょう。しかし、祈り求めることを始める者は、御座のもとでこそ、信仰の御霊が与えられることを見出すはず

です。「すでに受けたと信じなさい。」私たちが信じなければならないのは、自分が求めたものが与えられるということであるのは明らかです。御父は最善のものを知っておられるので、別のものを

お与えになるかもしれないなどと、救い主はおっしゃらなかったのです。信仰が移れと命する山、その山が海に移るのです。祈りと願いによって何もかも神に申し上げることの報いは、心と思いを守る神よりのうるわしい平安です。これは信頼の祈りです。この場合、私たちが求めたものを、神がかなえてくださるかどうかが判断できません。私たちは、子としての日常生活のあらゆる事柄を神に知っていただきます。与えてくださるかどうかは神におゆだねするのです。しかし、イエスがここで言われている信仰の祈りは、これと違って、はるかに高度の祈りです。神のみわざに対する関心であろうと、私たちの日常生活における心配事であろうと、求めるものを何でも与えてくださると確信し、御霊によって約束のうちに堅く立つほど、御父に栄光を帰することはありません。こう考えてくる時、自分が求めたもののそのものが与えられることを、はっきりと知ることができます。二三節で、イエスがこのことを明確に述べておられるのを見てみましょう。「心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりになると信じるなら、そのとおりになります。」これこそ、イエスがお語りになった信仰の祈りの祝福です。

「す、で、に、受、け、た、と、信、じ、な、さ、い。」これは最も重要なことですが、その意味は、しばしば誤解されています。今祈っているうちに、求めたものをすでに受けたと信じなさい！ 自分の経験としてそれを受け、自分の目でそれを見るのは、少し後になるかもしれない。しかし、今見なくても、あなたは天において御父からすでにそれを与えられたと信すべきなのです。祈りの答を与え

られること、あるいは受けることは、イエスを受け入れることや罪の赦しを受けることと同じで霊的なことであり、感情とは別の、信仰による行為なのです。赦しを求めてみもとに行く時、イエスが私のために天におられることを信じ、イエスを受け入れます。神のみことばに従って何か霊的な賜物を求めてみもとに行く時、求めたものはすでに与えられたと信じます。それがすでに与えられていると信じ、信仰によってそれを握りしめるのです。そして、それが自分のものになったことを神に感謝します。「私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになえられたと知るのです。」

「そうすれば、そのとおりになります。」これは、初め信仰によって天において私たちに与えられたものが、個人の経験の中で自分のものとなることです。自分の祈りが聞かれ、求めたものをすでに与えられて、なお祈る必要があるのでしょうか。祈りが必要でなくなる場合があります。この場合、経験上まだ与えられていなくても、祝福はすぐにでもたらされようとしているので、ただ確信を持ち続け、信仰のあかしとして、すでに与えられたもののゆえに神を賛美すればよいのです。もう一つ、与えられた信仰が忍耐強い祈りを続けることによって更に試され、強められなければならない場合があります。私たちのうちと周囲にあるすべてのものが、すでに十分に熟し、信仰によって与えられた祝福を現せるまでになっているかどうかは、神だけが御存知です。エリヤは、雨が降ることを確かに知っていました。神はそれを約束されています。それでも

エリヤは七回祈らなければなりませんでした。しかもその祈りは、見せ物でも遊びでもありません。求め続ける者の心の中と、祈りが実際に働く天においては、一つの強烈な霊的現実なのです。「約束のものを受けるのに必要なのは、信仰と忍耐です。」信仰は、確信に満ちて、すでに与えられていますと言います。忍耐は、天においてすでに与えられた賜物をこの地で見るまで辛抱して祈ります。「すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」「すでに受けた」と、「そのとおりになります」との間に、信じるということがあるのです。信じることによって、賛美と祈りが結ばれるのです。

さて、もう一つだけ覚えてほしいことがあります。それは、これを言われたのがイエスだということです。私たちは、天が私たちに對して開かれるのを見、御座にいます御父が、信仰によって求めたものを与えてくださったのを見ました。私たちの心は、自分がその特権にふさわしくないという恥しさと、明らかに自分の手に届く所に置かれているものさえつかみそこねるのではないかという、あまりにも弱い自分の信仰への恐れでいっぱいになります。しかし、私たちを強め、希望を与えてくれることが一つあります。それは、このメッセージを御父からもたらしてください。それは、イエスであるということです。イエス御自身この世におられる時、信仰と祈りの生活を送られました。イエスがいちじくの木になかったことを見て弟子たちが驚いた時、イエスは彼らに自分と同じ生き方ができることを教え、いちじくの木だけでなく、山に命じて、山はその

命令に従うと言われたのです。イエスは私たちのいのちです。この地におられた時のイエスが、今私たちのうちにおられます。その教えられたものをすべてお与えくださるのです。イエス御自身、私たちの信仰の創始者であり、完成者です。イエスは信仰の霊を与えてくださいます。そのような信仰は自分にふさわしくないなどと恐れる必要はありません。この信仰は、御父の子らすべてにふさわしいものなのです。御父のみことと愛に自分自身をゆだね、御父のみことばと力を信頼する者ならば、だれにでも手の届く信仰です。愛するクリスチャンの皆さん！ このみことばが、御子であり、私たちの長兄であるイエスが語られたという事実によって勇気づけられましょう。そして、こう答えましょう。恵み深い主よ。私たちはあなたのみことばを信じます。すでに与えられたことを信じます。

恵み深い主よ。あなたは、御父の愛と、御父の愛がもたらすあらゆる祝福の宝を私たちに示そうとして、御父のみことばからおいでになられました。主よ。あなたはこの日、ふたたび門を広く開き、私たちの祈りの自由に関する、あのようになくさんの約束をお与えくださいました。私たちの貧しい心が、その約束をほとんど受け入れてこなかったことを恥しく思わないわけにまいりません。私たちにはあまりにも大きすぎて、信じ切れませんでした。

主よ。今こそ、「祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい」というあなたの尊いことばを受け入れ、保ち、用いることをお教えください。恵み深いイエスよ。私たちの信仰が強くなるためには、あなた御自身に根を下ろさなければなりません。あなたのみわざは、私たちを罪の力から全く解放し、御父への道を開いてくださいました。あなたの愛は、私たちを、あなたの栄光と力とに完全にあずからせたいと願っておいになります。あなたの御霊は、完全な信仰と確信の生活へと私たちを近づけようとなさいます。私たちは、あなたの御教えによって、信仰の祈りをささげることが学べると確信します。あなたは、すでに与えられたと信じることで、できるように私たちを訓練して祈るようにさせ、また、自分の求めたものは必ず与えられると信じるようにさせてくださいます。主よ。あなたを知り、信頼し、愛する者とならせてください。あなたのうちに生き、とどまる者とならせてください。そうすれば、私のすべての祈りがあなたにあって神の御前にささげられ、私のたましいは、あなたにあって、自分は聞かれるという確信を持つことができるからです。アーメン。